

茶会オンラインで

障害・国籍越え伝統つなぐ



（上）メイン会場の京銘竹の茶室から配信する
（右から）田中さんと加藤さん／和束町中平
田・スマートワークオフィス（画面を見な
がら、自分でお茶を点てて味わう参加者同
日市上植野町）

コロナ社会
ティースタジアム

ビデオ会議アプリZoom（ズーム）を使って茶の交流を楽しむ「SDGsオンライン茶会」が、和束町を発信地に開かれた。新型コロナウイルス禍の中、「3密」を防ぎながら、オンラインならではの気軽さを生かし、参加しやすく、多様で持続可能な社会につながる新たな茶の形を試みている。

SDGsへ新たな形 和束から発信

同町のスマートワークオフィス（同町中平田）をメイン会場に、町PR大使の裏千家助教授田中賀鶴代さん（60）が企画し、障害の有無にかかわらず茶文化を広め、誰もが生きづらさを感じない社会を目指す「車いすおもてなし隊」の加藤千明さん（31）がお点前を披露した。

「障害があることや国籍が違うといふことで茶道を諦める人がいないよう機会を広げ、伝統をつないでいきたい」と田中さんは話す。国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）とのつながりを強調した。

会場には、大山崎町に工房がある竹垣職人の真下彰宏さん（43）＝龜岡市＝が、京銘竹で茶室を組み立てた。真下さんは「プラスチック製品などの使い捨てを改める中で、昔から日用品として使われてきた竹製品を現代に合わせた形でなじませていきたい」と思いを込めた。

午後2時、亭主の田中さんを含め13人が府内外の自宅や職場からズームでつながった。現地時間が午後10時の海外からの参加者もあり、それぞれの生活に合わせ、多様な人が交流を楽しんだ。

茶室には「疫病退散」の願いを込められた鬼の大津絵や、内側に「福」と描かれた茶わんなどが飾られ、真下さんは鬼と絡め、人気アニメに登場する竹小物を披露した。

参加者は事前に送られた和束茶を、加藤さんの説明とお点前を画面で確認しながら、自分で点て味わった。参加した男性は「コロナ禍で人との出会いが疎遠になる中で、国内外の人と『茶会』という場で交流できるのは刺激になる」と話した。

田中さんは「オンラインの気軽さを生かしつつ、もてなす側ももてなされる側も、服装など茶道ならではの緊張感をどう保っていくか、いいバランスを見つけていきたい」と笑顔を見せた。

（鷹塚朱里）

可能な開発目標（SDGs）とのつながりを強調した。

近羽原橋萌輔（原弘）

近羽原橋萌輔（原弘）